

かわかみ ミネルバ通信

佐賀県教育センター
平成6年7月14日

《巻頭言》

課題解決へ汗をかこう

佐賀県教育センター 所長 村山 勝



世界各国には、それぞれの国の社会的習慣や社会制度に基づく多様な学校制度がある。ご承知のようにアメリカ合衆国では各州が公教育について包括的権限を有しているため、州によって義務教育年限も異なり、各学校の修業年限も異なっている。例えば義務教育年限は9年が最も多いものの6年から12年と幅があり、また、6-3-3制が多いものの6-2-4制や5-3-4制、4-4-4制もみられるといったぐあいである。

世界の学校制度を大別すると、日本やアメリカ合衆国のような単線型、身分制度を基盤にし近代初頭以降ヨーロッパで行われていることからヨーロッパ型ともいわれる複線型、それに単線型と複線型の中間に属する中間型（フォーク型）の三つがある。しかし、各国の教育制度も万古不易ではない。むしろ近年、社会の変化に対応した教育制度の改革を積極的に押しすすめているのが実情ある。

わが国の学校制度が単線型に移行したのは、第二次大戦後のことであり、昭和22年3月に制定された学校教育法により、現行の6-3-3の学校制度が成立した。これが第二の改革といわれるものである。この改革では新しい日本を象徴する様々な取り組みがなされ、教育の機会均等、

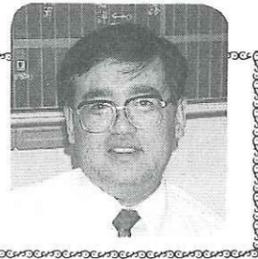
9年制の義務教育、男女共学、教育の政治的・宗教的中立性等が定められ、また、教育課程審議会の審議に基づく学習指導要領を各学校における教育課程の構成及び教科書編成の基準として示すこととなった。今年度から高等学校においても学年進行で実施されている新しい学習指導要領も昭和62年12月に出された教育課程審議会の答申に基づいて示されたものである。

今日、わが国の教育は大きな転機を迎えており、多くの教育改革に関する提言が出されている。これは、わが国の教育が、第二の改革の下で進学率の上昇等に見られる量的拡大や全国どこにおいても高い質の教育が受けられるという世界に類を見ない成果をあげてきたが、一方では様々なひずみが生じてきたことによるものである。

第二の教育改革以来約50年が経過した。ドイツの詩人ハイネは「どの時代もそれぞれの課題があり、それを解くことによって人類は進歩する」といつているが、本教育センターとしても教育の今日的課題の解決に向けて積極的に取り組み、教職員の方々のご期待に応えるよう努力しているところである。

新しい学力観に立つ評価

所員 寺崎 武利



1 新しい学力観に立つ学習指導の在り方

学力の考え方には、いろいろな論があるが、学校教育の範囲からその要素を分析すると、次のようにまとめられよう。

- (1) 興味・関心・意欲などの情意面からの「学ぼうとする力」
- (2) 考える力、的確に判断する力やそれを豊かに表現する力および学び方を身に付ける力などの「学ぶ力」
- (3) 学習の結果としての分かったこと、できたことを中心とする「学んで得た力」
- (4) 学んだことをもとに応用したり、創造したり、行動したりする「学んで得たものを応用する力」

これまでの学習指導は「学んで得た力」の定着を中心に行われてきた傾向があるが、これからの学習指導は「学んで得た力」のみにとどまらず、「学ぼうとする力」や「学ぶ力」も重視し、個に応じながら進めていく必要がある。

2 新しい学力観に立つ評価の考え方

(1) 評価基準から評価規準へ

指導要録の改訂により、これまでの評価基準が評価規準へと改められた。基準には「～が分かった」「いくつできた」というような量的に測る意味合いが強く、規準には「～しようとする」「～と考えている」というような質的に測る意味合いが強い。つまり、知識・理解や技能を中心とした評価の考え方から意欲や思考を重視していく評価の考え方への改訂であり、前述の学習指導の在り方と深い関連があると言えよう。

学力と評価をこのように考えてくると、指導要録の「観点別学習状況」の評価が関心・意欲・態度、思考・判断、技能・表現、知識・理解の順に並んでいる理由も分かるし、観点別の目標分析や評価の重要性、必要性も浮かび上がってくる。

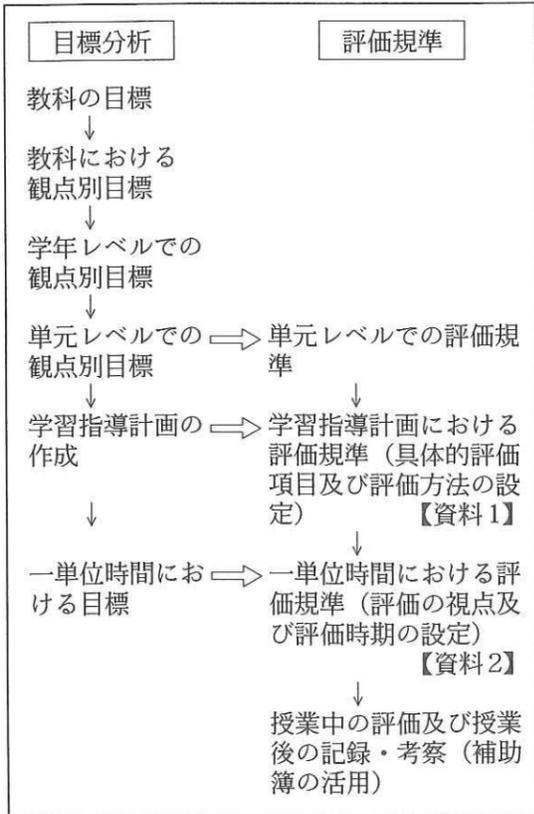
(2) 新しい評価の考え方

新しい学力観に立つ学習指導では、1つの重要な視点として個に応じた指導があげられる。学習指導と表裏一体となっている評価についても、児童生徒一人一人の可能性を積極的に評価していく必要がある。つまり、一人一人のよさをと

らえる評価とそれを生かし伸ばそうとする指導が重要である。この指導と評価の一体化を進めるにあたってこれからの評価の在り方を『児童指導要録に生きる通知表・補助簿』（児童評価研究会編・明治図書）では、次のようにまとめている。

受け身的評価から主体的評価へ
結果の評価から過程の評価へ
部分的評価から包括的評価へ
否定的評価から肯定的評価へ
一時的評価から継続的評価へ
量の評価から質の評価へ
平均的評価から個別性尊重の評価へ
遅延的評価から即時的評価へ
教師の評価から自己評価・相互評価へ

3 観点別評価の具体化



新しい学力観や評価観を生かしていくためには、観点別に評価規準を具体化し、学習指導の中に計画的な評価を位置づけ、教師の支援・援助を行い易くすることである。換言すれば事前に①どこで、②だれが、③何を、④どのように評価するのかを明確にし、評価したものをどう活用するのか計画しておくことである。そのために、前項のような手順で評価規準の具体化を図っていったらどうであろうか。なお、教科の目標から学年レベルでの観点別目標までの作成に当たっては、『指導書』『指導要録付属資料「観点別学習状況評価のための参考資料」』等を参照いただきたい。

【資料1】学習指導案における評価規準の設定（具体的な評価項目及び評価方法の設定）

学習時配	主な学習活動	評価項目と方法					
		社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断	観察・資料活用技能・表現	社会的事象についての知識・理解		
と ら え る	1 教科書をもとに、日本と関係の深い国々について調べる。 ・アメリカ合衆国 ・中華人民共和国 ・オーストラリア	経済や文化のつながりの深い国について関心を持つこととする。 (観察・発言)	3つの国の文化や生活を、日本と比較しながら考える。(ノート)	資料をもとに、日本は多くの国とかがわりをもっていることがわかる。 (発言)	3つの国の文化や生活についてわかる。 (ノート)		
	2 「時津先生コーナー」や海外ニュースを調べたり、歴史学習をふりかえったりして、学習問題をつくる。 日本と関係の深い国々について調べ、討論会を開こう						
	3 3 「自分の学習課題を決め、検証計画を立てる。 ・調べる国 ・調べる内容(何を中心に) ・調べる方法(どのようにして)					自分の課題や学習方法を考える。(課題用紙)	これからの学習についての問題をとらえる。 (観察)
	4						

【資料2】単位時間における評価規準の設定

流れ	児童の活動	教師の支援	評価の視点
とらえる	1 世界の国々の自然やくらしなどのスライドを見る。 ・オランダ(自然・干拓) ・フランス(都市) ・スイス(自然・環境対策)	・ヨーロッパの特色ある国々のスライドを提示することにより視覚的に外国の様子をとらえることができるようにする。	
ふかめる	2 調査したことや発表会で学んだことをもとに、これからの日本の在り方を中心にして話し合う。 ・もっといろいろな国について調べてみたい。 ・海外で仕事ができるような人になりたい。 ・日本に住む外国人と仲良くなりたいたい。 ・わたしたちは、外国のことをもっと知り、外国と仲良くしていく必要がある。	・これまで調べたり、聞いたりしてわかったことや思ったことを出し合い、これからの日本の歩むべき道について自由に自分の考えを発表できるように努める。 ・教師は司会者的役割を行い自由に意見を述べられるように場作りをする。	進んで話し合いに参加しようとしているか。 (発言・表情) 世界中の日本という立場で、自分の考えを述べたりしようとしているか。 (発言)
まひとらめける	3 世界数カ国の学校を訪問されたS先生の話聞く。	・実際に外国の学校を視察された先生に登場いただき、広い視野から国際理解について語ってもらおう。	

4 評価を評定に

教師の一言によって子供のやる気も起こり、自信も生まれてくる。新しい評価観にあるように、その子のよさを見だし、累積し、伝え、指導に生かす評価であるべきである。そのためには、ペーパーテストに頼り過ぎず、その子のよさをメモする補助簿を大いに活用し、通知表や指導要録の所見欄の記述へとつなげていくべきである。

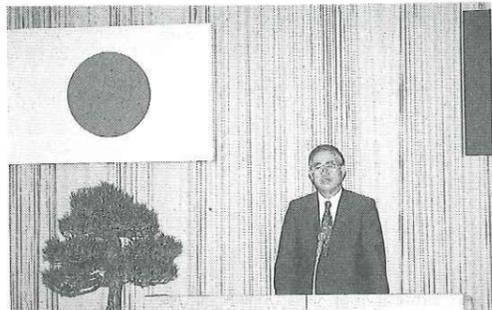
このように考えてくると、今、一番大切なことは、まず教師自身の評価に対する考え方を改めることではなかろうか。そして、児童生徒のよさをしっかり観る目を育てていくことではなかろうか。

5 授業の行動化を図る

新しい評価観を大切にしたい授業を考えると、着座による一斉授業では、児童生徒一人一人の個性を見いだすことはなかなか難しいし、個に接し、個に応じた指導は困難である。そこで、体験学習を取り入れたり、問題解決学習に取り組んだりして学習過程を考えることが必要である。また、個人学習やグループ学習などを取り入れるなど学習形態も工夫して、授業の行動化を図ることが大切になってくる。こういう意味からも、ティーム・ティーチングの授業や中学校における課題学習、選択履修の授業などが重要になってくる。



第15回 佐賀県教育センター 研究発表会概要



《開会式での県教育長あいさつ》

第15回佐賀県教育センター研究発表会が5月13日(金)、県内の小・中学校、高等学校、特殊教育諸学校の教師や教育関係者、約250名が参加して開催された。

高等学校の入試改革等、教育改革の全国的時勢において、教育の今日的課題に対する関心が高まる中での今回の研究発表会となった。

全体会では「豊かな人間性を育む国際理解教育の進め方」という研究主題で、今年春まで3カ年にわたり研究を続けてきた前研究員の貞包弘章教諭(現芙蓉小学校)が発表された。続いて、午後からは教科等領域別に分かれ、研究発表と研究協議が行われた。

今年度は児童・生徒の個性化や社会の国際化、情報化に対応し、豊かな感性や一人一人の主体性を育む指導法が、分科会の研究主題に多く取り上げられている。

教育実践・教育研究論文では11名(うち1名が奨励賞)が入選。なお、優秀作品2編については佐賀県教育興隆大会で表彰される予定である。

◆参加者の声、声、声(感想、意見等)

研究発表会に参加して思うことは、発表までの取り組みで、多くの方の力添えがあったことだろうということです。先生方の努力されている姿を拝見し、少しでもその鋭気を自分にプラスしたいと思います。

教育実践・教育研究論文の入選者の方々の努力には本当に感心させられました。分科会では中学校技術・家庭と中学校CAIに参加させていただきましたが、そこで残念に思ったのは、参加者が少なかったことです。

今後、ますます充実した研究発表会であってほしいと願うとともに、各先生方の労に敬意を表したいと思います。

鳥栖市立田代中学校 教諭 片波 正志

教育センター研究発表会への参加は今回で2回目でしたが、昨年にもまして独創的な教育実践論文が多かったように思えました。普段の授業や活動に一工夫することで、こんなにも生徒の個性を引き出すことができたり、国際理解教育を進めていけるものかと感心させられました。

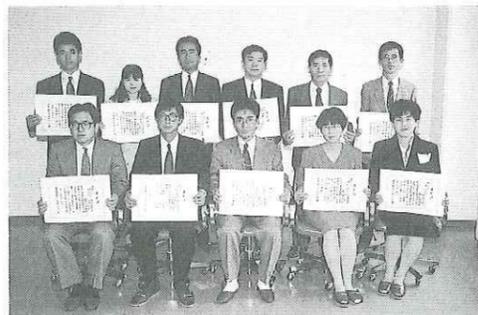
また、小・中学校の実践例の中に、高校でも取り入れられるものもあり、今後は自分の授業をもう一度見直し、自己研鑽を積んでいきたいと思いました。

唐津北高等学校 教諭 山口 明德

全体発表の小学校の取り組みの例として、佐賀で行われているバルーンフェスタの催しへの参加や、世界の国の旗やお面を教材化した図工の授業等の紹介がありました。国際理解教育は直接体験を重視すべきであることや、長期的に継続して取り組んでいくことが大切だと感じました。

島英彰先生の発表では、県内の特殊学級の教育課程や教育内容について、統計結果や実践例を紹介され、その中で、現在、教科別の指導形態をとっている特学が実に多いことに驚きました。障害児教育は、通常の教育内容をやさしくしたものではなく、個に応じた生活づくりをめざす教育を工夫していくべきではないでしょうか。

金立養護学校 教諭 熊谷 真理子



《教育実践・教育研究論文 入選者》

上段左から

武雄市立武内小学校
武雄市立御船が丘小学校
北茂安町立北茂安中学校
三田川町立三田川中学校
伊万里市立南波多中学校
佐賀市立城西中学校

教諭 片渕 文徳
教諭 小田 恵美
教諭 野口 敏雄
教諭 幡生 芳隆
教諭 栗原 崇
教諭 大坪 昌幸

下段左から

鳥栖市立鳥栖小学校
鹿島市立鹿島小学校
三瀬村立三瀬小学校藤原分校
白石町立北明小学校
佐賀市立開成小学校

教諭 小森 紀幸
教諭 井上 俊明
教諭 尼寺 広樹
教諭 島ノ江三知
教諭 稲富 洋子

「個に応じる教育」「社会の変化に対応する教育」を中心とした研究調査

～平成6年度 研究テーマと研究委員の紹介～

No.	研究領域	研究テーマ	No.	研究委員会	担当所員	研究委員
I	学習形態	「個に応じ、個を生かす」チーム・ティーチングの在り方	1	小学社会	平田 陽介	坂井 満(江北小) 小池 充(芙蓉小)
			2	小学算数	千住 由一朗	稲田義邦(山内西小) 上野義晴(明倫小)
			3	中学社会	塩谷 北海	笹山清彦(啓成中) 杉町宣幸(西有田中)
			4	中学数学	岡 哲也	池田 新(有明中) 山浦 修(多良中)
			5	中学英語	三枝 出	中島裕二(諸富中) 吉田喜美子(鳥栖中)
II	学習方法	生涯学習体系への基礎を培うための個に応じた学習方法の充実	1	小学国語	権 藤 順子	釘本 浩(附属小) 宮原久直(基山小)
			2	小学音楽	緒方 真智子	田久保理生(本庄小) 永池まち子(明倫小)
			3	中学国語	大石 浩城	石橋道秀(附属中) 宮崎信仁(嬉野中)
			4	高校数学	矢ヶ部 清人	横尾博見(佐賀北高) 岩崎良子(伊万里農林高)
			5	高校英語	千手 正秋	竹森唯幸(佐賀西高) 田中 禎(致遠館高)
III	個を生かす評価	観点別評価を生かした指導と評価の一体化	1	小学教育評価	寺崎 武利	佐藤幸規(若葉小) 古川規子(思斉小)
			2	小学生生活	中村 和彦	古澤秀樹(鳥栖小) 中野百枝(古枝小)
			3	中学美術	下村 哲也	杉町 徹(鍋島中) 桑原玄二(城東中)
			4	中学技術・家庭	井手 和憲	山口秀夫(啓成中) 森 一弘(西部中)
IV	個を生かす教材の開発	個を生かす教材の開発	1	中学理科	古藤 倫彦	橋村浩一(上峰中) 江浦伸昌(附属中)
			2	高校国語	山田 裕章	岩崎俊郎(伊万里高) 時津正純(致遠館高)
			3	高校公民	池田 涉	時里一義(鳥栖高) 北島俊郎(鹿島実高)
			4	高校理科(物理)	東 嶋 徹	坂本武敏(鹿島高) 吉岡義博(牛津高)
			5	高校理科(化学)	嘉 村 敦	石井智久(佐賀西高) 山口明德(唐津北高)
			6	高校理科(生物)	坂 本 兼 吾	池田憲一(唐津北高) 鶴田靖雄(東松浦高)
			7	高校理科(地学)	本 告 正 澄	向 一字(伊万里高) 北村哲一(唐津東高)
V	教育相談・特殊教育	生き生きと生活する子どもをめざして	1	教育相談	小山 正己 他4名	田中安子(久間小) 原口 毅(成和小) 長森君代(山内中) 平山健治(盲学校)
			2	特殊教育	畠 山 富士雄 他2名	峰松洋子(鹿島小) 島 英彰(西郷小) 久野隆裕(伊万里養護)
VI	興味・関心に関する調査研究	児童生徒の興味・関心と問題解決への意欲に関する調査	1	関心・意欲	直 鳥 信 明 他5名	
VII	学校週5日制に対応する教育	学校週5日制の月2回実施に伴う教育課程の研究	1	小学週5日制	宮崎 崇 他1名	溝内義己(開成小) 一ノ瀬靖子(吉田小)
			2	中学週5日制	白水信義 他1名	井上武夫(鍋島中) 末次利隆(三田川中)
			3	高校週5日制	福山康登 他1名	白川武人(佐賀西高) 久富光祐(佐賀農高)
VIII	環境に関する教育	自ら環境にかかわっていく児童生徒を育てる教育活動	1	小学理科	本 村 正 信 草 場 浩	長谷川晃三郎(山代東小) 岡崎和久(嘉瀬小)
IX	情報化に対応する教育	教育情報システムの利用推進に関する研究	1	C A I (1)	原 秀勝 他1名	堀江秋夫(佐賀工高) 橋村清美(鳥栖中)
			2	C A I (2)	納塚定生 他1名	古川美樹(武雄北中) 渡辺直也(鳥栖北小)
			3	C A I (3)	川崎健二 他1名	浦郷孝一(志道小) 草場聡宏(城西中)
			4	教育工学	井上常茂 他1名	大川内弘紀(杵島商高) 坂本明弘(鳥栖高)
X	これからの産業社会と教育	これからの産業社会と教育の関わりについて	1	高校産業教育	橋 本 孝 他3名	

教育課程の改訂に伴う新技術の導入

FMSの紹介

1 はじめに

我が国における技術革進の進展やそれぞれの専門分野に係る知識・技術の量的拡大と高度化は著しく、高等学校の職業学科における内容と実際の産業界で扱われている知識・技術との間に隔たりがみられるようになってきている。

現今の企業においては、組織化、自動化が急速に進みつつある中で、生産性の向上等の必要性から、総合的に取り扱うシステム技術が重要視されている。このような技術は、業務を能率的・合理的に処理するための基礎となる技術であり、あらゆる分野にわたって共通的に利用できる応用範囲の広い技術でもある。したがって、高等学校の工業に関する学科においてはこれからの技術に関する基礎的な内容を一層重点的に指導できるようにするとともに、他の学科においても学科の性格等に応じて積極的な導入を図っていく必要がある。

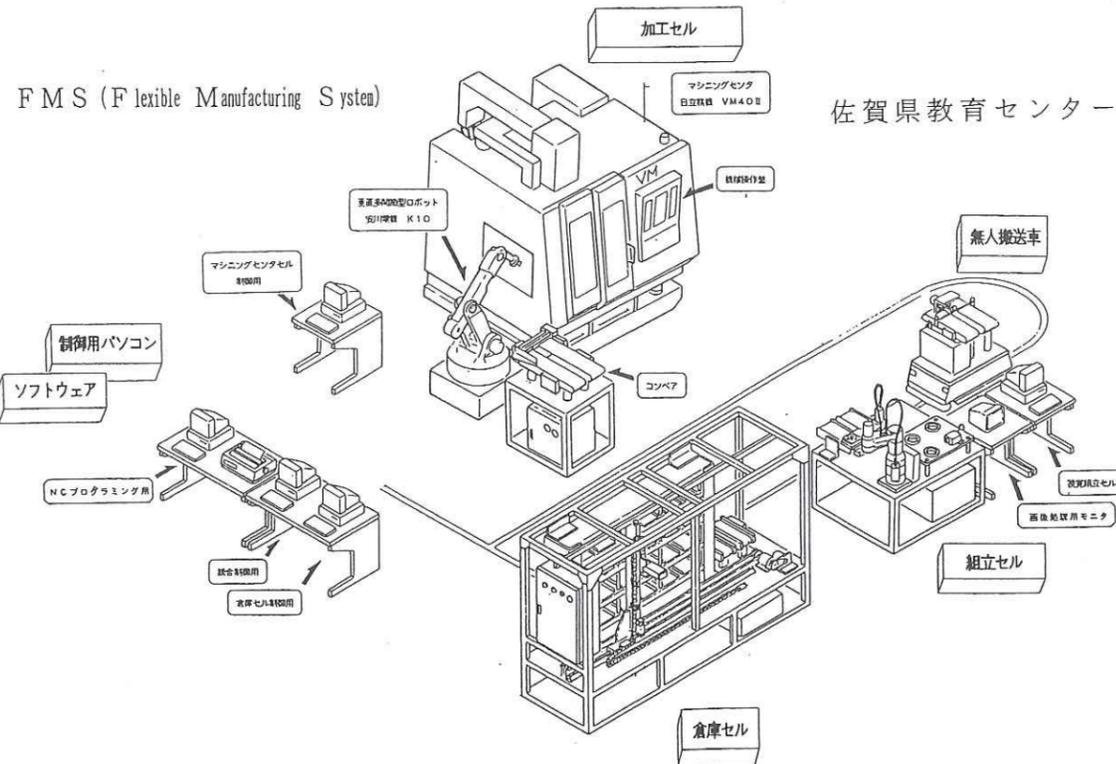
このように先端技術に対応できる職業高校の在り方が問われる中で、各県の教育センターや

各職業高校は新技術の導入を行うようになった。

当センターにおいても、産業経済の変化への対応という観点から、11年間使用してきたNC (Numerical Control: 数値制御) 工作機械を先端技術のFMS (Flexible Manufacturing System: 多品種中小量生産システム) に更新した。フル装備での導入は九州内では早い方である。

導入にあたっては、次のことを満たすように計画した。

- ① 教員研修、生徒実習の両方ができる。
- ② システム構成は、加工セル、組立セル、倉庫セルとする。
- ③ 各セル単位で運転ができる。
- ④ 各セル間を無人搬送台車が移動できる。
- ⑤ 加工セルの工作機械は、システム運転および単独運転ができる。
- ⑥ 生徒実習においては、加工セルの工作機械はメモリ運転とし、運転中にデータ転送ができる。



2 本センターのFMS

当センターのFMSは機械加工、画像処理による検査・組立、自動搬送、自動倉庫の制御・管理など個別学習から、複数の装置による多品種生産を制御する総合学習までを含め、幅広く対応できる本格的なFMSです。システムを構成している機器は産業界で実際に採用されているものです。

システム運転では次の3つのモードで運転が可能です。

(1) 加工モード

指定されたワークを倉庫から取り出し、加工セルで加工し、倉庫に戻す。

(2) 組立モード

倉庫にある加工済みのワークを組立セルで組立を行い、倉庫に戻す。

(3) 加工・組立モード

指定されたワークA・Bを倉庫から取り出し、加工セルで加工した後、組立セルでA・B両ワークの組立てを行い倉庫に戻す。

3 主なハードウェア構成

(1) マシニングセンタ

ワーク着脱ロボットから渡されたワークを自動固定し、20本収納のマガジンから指定された工具を取り出し、面削り・曲面削り・穴あけ・中ぐり・タッピングなどいろいろな加工をプログラムにより数値制御で自動的に行うことのできる工作機械です。

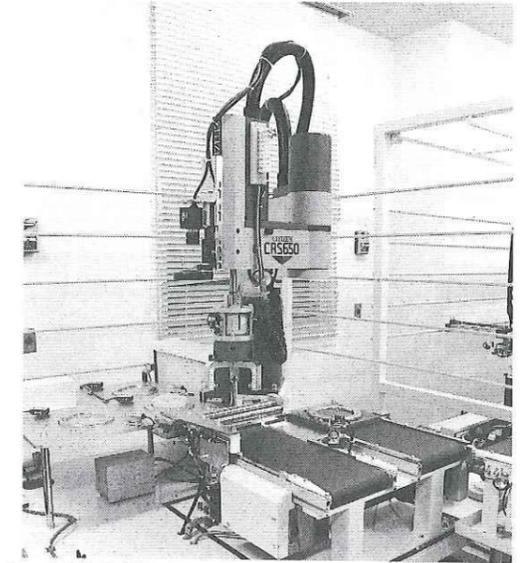


(2) ローディングロボット

垂直多関節形の6軸制御ロボットでマシニングセンタと連動して、ワークの着脱を行います。6軸制御であるためしなやかな動きができ、ロボットドアからマシニングセンタに進入してバイスにワークをセットできます。

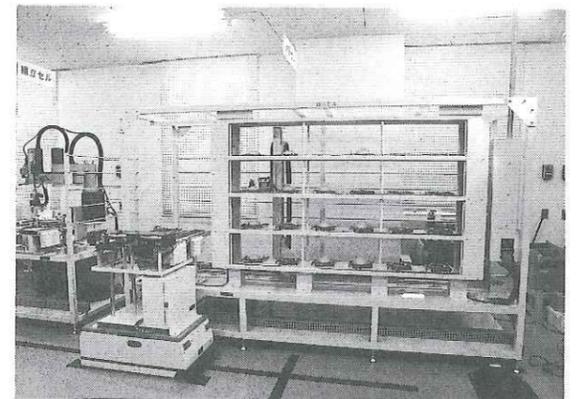
(3) 組立ロボット

水平多関節形の4軸制御ロボットで軸頭にCCD (Charge Coupled Device: 電荷結合素子) カメラを備え、画像処理機能により工作物の形状と寸法を測定してA・B両ワークの組立て作業を行います。



(4) 自動倉庫

4段6列の収納ラックを備え、Aワーク・Bワーク・組立品の在庫管理を行い、3軸制御のスタッカークレーンで工作物の入出庫管理を行います。



(5) 無人搬送車

床に貼られた磁気テープの誘導で加工セル・組立セル・倉庫セル間のワークの搬送を行います。90°ターンや180°スピントーンや円弧ターンができ、狭い場所でも搬送が行えます。

(6) 制御用パソコン

加工セル・組立セル・倉庫セル用のパソコンでそれぞれのセルを制御し、NCプログラミングパソコンでマシニングセンタにNCデータを転送します。またシステム制御用パソコンでシステム全体の統合管理を行います。

佐賀県学校適応指導教室「しいの木」の半年

～生きる喜びを実感させ、自信を持たせる適応指導を求めて～

はじめに

登校拒否を主訴とする来所相談は、ここ数年、教育センターの全相談件数の8割を占め、態様も複雑化してきている。

教育センターでは、これまでの研究の結果「登校拒否児童生徒は、体験が乏しく、人間関係の取り方がまずい。また規範意識が高く、柔軟性に欠ける。(センター紀要13・16集)」と、これまでの経験「一人一人を大切にしながら根気よく対応していくと、どの子ども行動が自由になり、自立へ向かって確実に歩み始めていく。」から、様々な体験活動を中心としたグループ指導の重要性を考慮した「子どもの会」を組織し、効果を上げてきたところである。

佐賀県学校適応指導教室「しいの木」は、平成5年9月1日、教育センターの一室を仮教室にして産声をあげた。

11月には、学習室・作業室・面接室・個室・プレイルームなどを備えた立派な建物が教育センター敷地内に完成し、スタッフ一同、気持ちを新たに、今日まで、登校拒否児童生徒への指導・援助に取り組んできた。



1 学校適応指導教室「しいの木」の目的

心理的・情緒的理由により登校できない状態にある児童生徒に対して個別や小集団での相談・指導を行い、自立を促しながら、集団生活に適応する力を育み、学校への早期復帰を援助する。

2 援助の方針

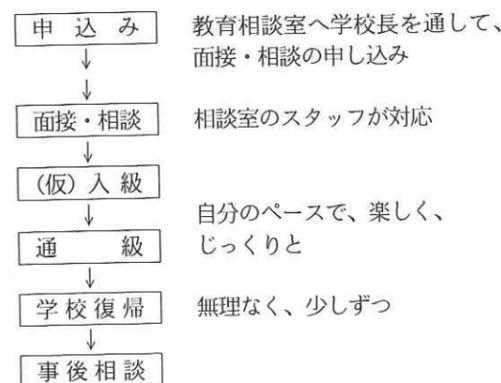
- (1) 人と人との出会いを大切にしてくつろげる場になるように援助する。
- (2) 自分自身の気持ちや考えを大切にしながら他の人と生活できるように援助する。
- (3) 集団の中で様々な体験を通して自信や充実感が得られるように援助する。

- (4) 一人一人に応じて、活動の内容を工夫し、自律的な生活ができるように支援する。
- (5) 教育相談室との連携を深めながら進める。
- (6) 学校・家庭・専門機関等と連携を保ちながら進める。

3 入級対象の児童生徒

- (1) 県内の登校拒否児童生徒で教育センターにおいて面接・相談を受け、学校適応指導教室における相談・指導が効果的と判断され、かつ通級が可能な児童生徒
- (2) 本人と保護者が学校適応指導教室への入級を希望し、在籍校長が学校適応指導教室への入級を認める児童生徒

4 申し込みから学校復帰まで



◆指導期間及び指導日時◆

- ①指導期間：原則として1年以内
- ②指導日：月曜日～金曜日
- ③指導時間：原則として10時～15時

5 児童・生徒の「しいの木」での活動

- (1) 日常の主な活動
スポーツ・囲碁・将棋・工作・読書・音楽鑑賞・ワープロ・教科学習・ハイキング等
- (2) 専門の指導者を迎えての活動
園芸教室・書道教室・絵画教室・茶道教室・陶芸教室・手芸教室・スタンドグラス教室
- (3) その他の活動
宿泊体験活動(2泊3日)・登山 等

6 「しいの木」における指導・援助の特徴

(1) 成長過程に応じた援助

通級は、子どもたちにとって、これまでのひきこもっていた家での生活とは一変することになる。まずは、通級できることを大切にしながら、無理のない程度に少しずつ段階を追って、活動内容や援助の仕方を変えて行っている。

(2) 個に応じた週時程

きめ細かい援助をするために、一人一人の成長過程が違うことを念頭に置き、その子なりの計画を立てさせ、成就感や達成感、主体的な自己像や自己価値観を獲得できるよう援助している。

(3) 体験活動を重視したカリキュラム

経験不足症候群といわれるように、現代の子どもたちは、いろいろなことを体験せずに来ていることが多い。自然の中で風や虫と戯れたり、他者と全力でぶつかるなどの体験する機会を多くして、たくましさや豊かな心を育てていけるようにしている。

(4) あたたかい教室環境

子どもたちが安心して過ごせるよう、教室内外の環境を工夫した。また、子どもたちには、少しずつ友達とのかかわりを増やし、対人的な自信を持たせたいとの思いから、ピアグループが生じやすい机、グループ活動に適した机などを準備し、いろいろな形態の活動にすぐさま対応できるようにしている。



(5) 連携を大切にして

① 学校との連携

子どもたちの日常の活動については、月末の通級状況報告書で報告している。また、急を要することや具体的な説明が必要なことは、電話で連絡を取り合ったり、学校を訪問して話し合いを持っている。また、通級者の担任の先生に教育センターへ来てもらい、心理学の専門の先生を囲んで、今後の援助の在り方などを話し合う「担任の会」を開いている。

② 家庭との連携

毎月1回「しいの木だより」を発行し、子どもたちの日常の活動の様子を連絡している。

なお、「しいの木だより」は担任の先生にも送付している。

毎月1回、スーパーバイザーを迎えて「しいの木親の会」を開き、「家庭」や「しいの木」での生活の様子を話し合っ、子どもたちの支援の在り方について相談に乗ってもらっている。

(6) 成長の記録

どんな小さなことも見逃すことなく、子どもの様子を記録し、その日の夕方、時間を取って情報交換をし、翌日の指導・援助に反映させている。

おわりに

学校適応指導教室「しいの木」では、教育センターが行ってきたこれまでの研究の成果を踏まえて、子どもたちが安心して活動できる場の提供を第一に考えて来た。また、指導・援助にあたっては、個別指導から集団指導へと段階を追いながら、様々な生活体験や自然体験・集団による創作活動や製作活動を中心に、子どもたちの一人一人が主体的に工夫しながら活動を広げていけるように配慮して行った。と同時に、教育センターの特性が生かせるように、教育相談室と「しいの木」の連携、学校や家庭との連携を密にしながら、子どもを多角的にとらえ援助していった。

平成5年度の通級者の内訳は、次表のとおりであるが、中学3年の3名は3学期になって、完全な学校復帰ができ、卒業式にも堂々と参加し、中学校生活を立派に締めくくり、高校への進学の夢を実現した。

	男子	女子	合計
小学生	0	0	0
中学1年生	1	0	1
中学2年生	1	2	3
中学3年生	1	2	3
合計	3	4	7

言うまでもなく、3年生の完全学校復帰は、教育センターのスタッフの力だけでなし得た訳ではない。家族の支援はもちろんのこと、在籍校の校長先生をはじめ諸先生方の多岐にわたるご尽力やクラスの友達の協力があってこそである。

紙面を借りて、そのご尽力・協力に対し敬意を表すとともに、学校適応指導事業に対し、なお一層のご理解・ご協力をお願いするものである。

再登校に向けて!!

～適応指導教室との連携～

Q: ずーっと家に閉じこもっていた子どもが「しいの木」に通級しはじめ、たいへん明るくなり、いろいろ話してくれました。びっくりしました。

ところで、通級しはじめると、こちらの方もホッとしまし、子どもへの連絡が少なくなったり、学級の子どもたちからの接触をどうしたらいいか戸惑ったりすることがあります。子どもへの連絡などはどうしたらいいのでしょうか。

また、子どもが再登校をはじめると、どのようにして受け入れたらいいのでしょうか。

A: これは、「しいの木」担任の会を開いた時に、久しぶりに子どもと会った担任の先生方から出された声です。

「しいの木」では、学校や家庭との連携を重視し、定期的に担任の会や親の会を開催しておりますが、その日は、最初に子どもたちと会っていただき、その後で担任の先生方と一緒に情報交換や問題点などを検討していきました。通級しはじめた子どもへの、担任の先生や学級の子どもたちからのかかわりについては、私たちの方は考えてもいませんでしたので、「なるほど!」と納得しました。このような問題点があるからこそ、連携を密にし、お互いに情報交換をしながら支援していく必要があることを強く感じたわけです。

いろいろと話し合いましたが、「しいの木」に通級しはじめたからといって、学級からの連絡をやめないで、今まで通り、ごく自然に学級の様子や行事などの連絡をしていただくことにしました。また電話などでも気軽に話ができるように「しいの木」についての話題がほしいということでしたので、さっそく毎月発行している「しいの木」便りを担任の先生にも送ることにしました。また、学級の友だちとの関係はこれからの成長や再登校に関わる意味で非常に大切になってきます。通級時間帯などの関係上、学級の子どもたちとだんだんと疎遠になりがちですが、休みの日などに遊びに誘ったり、手紙を書いたりなどの接触をしてもらうようにしました。

2月に実施した公開講演会で、講師の兵庫教育大学学長佐藤修策先生は、「家に分校をつくら

考えて、訪問したり、連絡したりしながら、無理に学校へ来させようとせず、心豊かに、心静かに支援していくこと。大切なことは“治す”という考え方ではなく、その子が“自分をつくり直す”ことを支援すると考え、無駄なことから思えても、その時反応しなくても、あきらめないでやっていくこと。そうしていくとかならず先生のことを思い出してくれるものです。」と述べられました。これは登校拒否に陥っているどの子にもいえることですが、子どもたちはあたたかい教育的支援をまっています。「しいの木」もそのような連携をとっていきたいと考えています。

また再登校をはじめるとのことですが、昨年度学校復帰していった中学3年生の3人の事例から、そこに共通することを紹介しましょう。3人の学校復帰は、「直接学級へ」というかたちではありませんでした。このことはいくつかの大切な視点をもっているようです。ひとつは受け入れとなる場所の問題です。3人のうち2人は校長室、1人は職員室が受け入れの場所となりました。それから保健室へ移動したり、あるいは教育相談室へ場所を移したりしながら、少しずつ教室との距離を縮めていきました。

二つ目は、多くの先生方がチームを組んで受け入れていただいたことです。校長室では、校長先生をはじめ教頭先生や教務主任、学年主任、生徒指導主事、教育相談担当などの先生方が、保健室では、養護の先生をはじめとして担任や同学年の先生方が、そして教育相談室では、教育相談担当をはじめとして、担任や教科担当の先生方が、ほんとうに見事にチームプレイを發揮していただきました。もちろん教室に戻った段階ではそれぞれの授業担当の先生方にも配慮や工夫をしていただいたとのこと。

三つ目は、その時にどんなことをするかという受け入れ時の活動の問題です。この3人の場合は、無理のない対応をしていただき、入試の面接の練習や教科の個別学習、保健室での作業等を、個に応じて工夫していただきました。

このように「どこで、だれが、なにを」の視点はたいへん参考になりました。特に日頃からチームをつくっておくことが肝要のようです。

佐賀県教育センターの機構と担当者

課・係・職名	氏名	分掌事務	課・係・職名	氏名	分掌事務
所長	村山 勝	所総括	教育経営係 研修員	宮原 昌佳	初任研
次長	副島 利彦	所長補佐	研修員	馬場 知之	初任研
総務課	課長	三浦 清輝	係長	福山 康登	指導相談企画調整・生徒指導
	係長	(三浦 清輝)	研究員	八田 洋子	教育相談(小)
	主査	飯盛 宏子	研究員	森山 洋一	適応指導教室
	主事	野口 順子	研究員	光武 充雄	適応指導教室
研究科	課長	蒲原 安則	指導員	小山 正己	教育相談(高)
	係長	千手 正秋	指導員	森田 弘子	教育相談(中)
	研究員	山田 裕章	指導員	平山 峰幸	教育相談(小)
	研究員	緒方真智子	指導員	天野 浩之	特殊教育
	研究員	千住由一朗	指導員	園田 泰洋	特殊教育
	研究員	三枝 出	研修員	嶋山富士雄	特殊教育
	研究員	中村 和彦	嘱託	今泉 正喜	適応指導教室
	研究員	井手 和憲	嘱託	寺町 和子	適応指導教室
	研究員	榎藤 順子	嘱託	原口 明子	適応指導教室
	研究員	塩谷 北海	課長	西森 秀夫	課総括
情報教育係	指導主事	池田 渉	係長	橋本 孝	情報処理教育企画調整・工業(高)
	係長	古藤 倫彦	研究員	山崎 昭典	電算機システム管理研究・商業(高)
	研究員	東嶋 徹	研究員	島 公二武	FAシステム管理研究・工業(高)
	研究員	坂本 兼吾	研究員	岩瀬信太郎	生徒実習・農業(高)
	研究員	草場 浩	係長	大島 正豊	教育情報システム管理運営研究・CAI(高)
	研究員	嘉村 敦	研究員	川崎 健二	教育情報・CAI(小・中)
	研究員	本村 正信	研究員	納塚 定生	教育情報・CAI(小・中)
	研究員	本告 正澄	研修員	井上 常茂	教育情報・CAI(高)
	指導主事	本告 正澄	研修員	古賀 敏文	教育情報・CAI(高)
	指導主事	本告 正澄	研修員	原 秀勝	教育情報・CAI(高)
研究科	課長	(副島 利彦)	指導主事	杉山 茂	教育機器管理研究・教育工学(高)
	係長	古賀 淳一	係長	宮崎 崇	教育資料企画調整・教育資料(小・中)
	研究員	白水 信義	研究員	岡 哲也	数学(中)
	研究員	直島 信明	研究員	下村 哲也	図画工作・美術(中・高)
	研究員	寺崎 武利	研究員	平田 陽介	社会(小)・国際理解教育
	研究員	黒木 正孝	研修員	金丸千寿子	家庭(小・高)技術・家庭(中)
	研究員	安永 伴吾	指導主事	矢ヶ部清人	数学(高)・教育資料(高)
	研究員	辻 裕一			
	研究員				
	研究員				

図書資料室ガイド

最近、当教育センターで入手した教育研究資料を紹介し
ます。資料室で利用できますので、ご活用ください。

受入番号	論 文 名	発 行 者 名
94-99	生徒の可能性を伸ばす教育課程の実践に関する研究	札幌市教育研究所
94-41	学ぼうとする力を育てる学習指導に関する研究(各教科)	茨城県教育研修センター
94-42	生徒の特性等に応じた選択教科の指導のあり方(音楽、美術、技術家庭科など)	〃
94-88	子供の可能性を拓く学習指導と評価に関する総合的研究について	熊本県立教育センター
94-98	個人差に応じた教科の学習指導法に関する調査研究	宮崎県教育研修センター
94-98	学習指導における情意的側面(関心、意欲、態度)の評価に関する調査研究	埼玉県立北教育センター
94-99	自ら学び生きる力を育てる学習指導に関する研究	札幌市教育研究所
94-100	自ら学ぶ力を育てる課題学習の指導法(興味・関心を高める教材開発を通して)	浦添市立教育研究所
94-122	新しい学力観に立った学習指導の進め方(子供のよさや可能性を生かす学習を通して)	埼玉県立北教育センター
94-105	個性が生きる学習指導のあり方に関する研究	岐阜県教育センター
93-381	イメージマップ・学習マップ活用ハンドブック	新潟県立教育センター
94-37	指導と評価の一体化に関する研究	香川県教育センター
94-90	マークシートテスト実施にかかわる問題点と解決方法の研究	三重県総合教育センター
94-103	確かな学力を育てる学習指導と評価	鹿児島県総合教育センター
94-113	授業の評価に関する研究(児童の学習意欲を高める指導技術について)	岡山県教育センター
94-16	主体的に学習に取り組む児童生徒を育てるメディアの効果的な活用法の研究	福岡市教育センター
94-34	学習効果を高めるための教材の構造化と具体化(教材データベースの構築)	尼崎市立教育総合センター
94-90	学習ソフトに取り入れるゲーム的要素(小学校オープンスペース)	三重県総合教育センター
94-117	情報教育と著作権について	尾張情報処理教育センター
〃	VISUAL BASICによるWINDOWSアプリケーションの作成	〃

教育センターインフォメーション

〈図書資料室の利用の仕方について〉

※ 個人貸出について

- (1) 同時に貸出できる図書は3冊までです。
- (2) 同一図書の個人貸出期間は10日以内です。
- (3) 研究紀要、教科書、雑誌の貸出、館外持ち出しはできませんので、必要な部分はコピーをお願いします。
- (4) 本の貸出、返却、紀要等のコピー等は、必ず係員までお申し付け下さい。

◆変わりました!◆

今回、所報に名称をつけ、大きさもA4版に改訂をしました。

ご覧になられて、まずお気付きの名称『所報かわかみ・ミネルバ通信』について由来を紹介いたします。

「かわかみ」は、皆様もご存じのように当教育センターの地名であり、溪谷と緑につつまれた

すばらしい環境のこの地から、教育関係のさまざまな情報をより多くの先生方に提供することができればと願ったものです。

「ミネルバ」とは、ローマ神話における、技術・職人の女神であり、ギリシャ神話のアテナと同一視され、その権能をも司ることができると言われます。つまり、私たち教師が、教育の専門家として、より高いものを求め、修養を積んでいくことを期して、この女神になぞられました。

『所報かわかみ・ミネルバ通信』にこのような願いを込め、先生方の教育活動に少しでもお役に立てるよう、さらに一層内容の充実を図ってまいります。

発行 佐賀県教育センター

〒840-02 佐賀郡大和町大字川上字西山

TEL 0952-62-5211 FAX0952-62-6404

(1-65)